

四 人生貧富苦樂輪轉之圖

世は遷流、間は差別と申して、世間は皆夫々異なつてゐて、更に同じ物がないと共に、暫くも止まず遷り流れてゐます。恰も寄せては返す岸邊の波の如く、將た四季の循環する如く、踊の輪にも似てゐます。樂みは悲みの跡をつぎ、悲みは喜の跡をつぎ、喜は憂の跡をつぎ、忽ちに榮へ、忽ちに衰へ、忽ちに富み、忽ちに貧しく、ほんに人生は、貧富苦樂の輪轉の境かよ。

目上 目下

人生貧富苦樂輪轉圖



↑ 向上 門

之を上圖に見よ。

人生世態の實況、之を假に十種に區分して見れば、貧富苦樂の有様は、正に恁んな風になつて、而もそれが何れを終と定めなく、グルグル輪轉するから面白い。何處からでも始められるが、先づ誰も好きな富満、金持から始めるとするか。強ち金

満家と云はれる程でなくとも、——眞の金満家はそんなことはない筈だが——少しでも懐に金があると、ツイ膽が大きくなつて、懐に納つて置けばよいものを、鼻にかけたがる。金が鼻にかゝると、僛慢になつて、人を馬鹿めると同時に、自惚れて煽てに乗つて有頂天になつて、意氣揚々得意満面、脚下にも氣がつかず、鼻持もならぬことになる。僛慢に次では奢侈、衣食住の三に亘つて、そろく柄にない贅澤が始まる。下駄は疊つきでなくては、着物に絹物でなくては、家も新築せねば、イヤ別荘もなくてはとなり。頭痛鉢巻で、苦しい工面をして見榮を張る。すると今度は淫佚と女狂ひだ。易い處では女郎買から藝者買、ズツと進んでお妾の圍物。さうなると遊興に夜も日も足らず、商賣も仕事もあつたものでなく、現をぬかせば、そこらぢうが

禍變くわへんのガタ崩れくつ。事業じげふには失敗しつぱいする借金しやくきんは嵩むかさ。まさかまさかに泥棒どろぼうも詐欺さぎもならず、投機とうきにでも手てを出だすか。すつかり當外あてはずれで、自暴自棄じぼうじきの果はてが「賣家うりいへと唐から様やうで書かく三代目だいめ」。お次つぎは定きまつて窮困きうこん。これまでが向下門かうげもんです。これではならぬと、驚おどろいて悔悟くわいごし、生れうまかはつて勤勉きんべんする。働はたらくばかりでも尻拔しりぬけがしてはと、萬事節約ばんじせつやくする。稼かせいで無駄むだに使つかはぬ所ところで貯積ちよせき、たまる一方ほうだ。たまつた時ときが富満ふうまん。これが向上門かうじやうもんです。上のぼる時ときは辛つらいが、下くだる時ときは早はやい。富満ふうまんだと氣取きとつた時ときが早橋はやけ慢奢侈まんしやし、そろく下坂くだりさかです。

歴史れきしは繰返くりかへす。こんな有様ありさまは時間じかん的てきにも空間くうかん的てきにも、事ことの大小だいせうに拘かゝらず、近ちかく一身しんの上うへにても見みられます。人ひと一代だいの上うへにも、又また短みじかく一年ねん一日いちにちの間あいだにも斯か様な輪轉りんてんが見みられます。而しかして之これが中心ちゆうしんは心こころです。三界がいゆあ唯一しん心こころ次第しだいで如何いか様やうにもなりません。

心こころこそ心迷こころまよはす心こころなれ、心こころ、心こころに心こころゆるすな